The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 『聖アントワーヌの誘惑』におけるキュベレーとアティス |
| Author(s) | 金﨑, 春幸 |
| Citation | Gallia. 2023, 62, p. 49-60 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/91098 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 『聖アントワーヌの誘惑』におけるキュベレーとアティス

金﨑　春幸

『聖アントワーヌの誘惑』第１稿（1849）におけるキュベレーの場面は、アプレイウスやルキアノスなど古代ローマ期の作家の作品をもとにして、クロイツェル『古代の宗教』の記述を加えてつくりあげられたことが、セズネックの研究によって明らかになっている[1)]。第１稿では Galli と呼ばれる祭司たちが登場し、キュベレーの像を運びながら、カスタネットやシンバルや太鼓が打ち鳴らされる中で踊り狂い、自らを傷つける様が描かれる。一方、1874 年の最終稿では、祭司たちの前にキュベレー神本体と青年アティスがあらわれ、最後にアティスは自ら去勢する。フローベールは最終稿のために、モーリーの『古代ギリシア宗教史』など 19 世紀の研究も踏まえて、この場面を練り直している。本稿ではセズネックが参照できなかった読書ノートも含め、プラン、下書きなどの読解によって変化の過程を追いながら、キュベレーとアティスの場面において何が問われているのか、明らかにしたい。

## 『聖アントワーヌの誘惑』（1849）におけるキュベレーの祭

フランス国立図書館で『聖アントワーヌの誘惑』の「ノートとプラン」と分類された草稿の中に、3 頁にわたる西アジアの神々に関する読書ノートがある[2)]。2 頁目がキュベレー、アグディスティス、アティスにあてられており、そのほとんどがクロイツェル『古代の宗教』第 2 巻からの引用である[3)]。ノートは「トロイヤ陥落の 297 年前、エリクトニオス王の統治下、キュベロス山に神々の母の像があらわれた」で始まる[4)]。この年に聖なる像があらわれ、ギリシア人はそのプリュギアの山の名前をとって「神々の母」をキュベレーと呼ぶようになったというのである。「キュベレーは山々の頂に玉座をもつ大母神であり、足元に広がる平原や谷に恵み深いまなざしを下ろす」とされ[5)]、また「紀元前 207 年、ペシヌスにキュベ

1）Jean Seznec, *Les sources de l'épisode des Dieux dans «La Tentation de saint Antoine»*（*Première version, 1849*）, Paris, Vrin, 1940, p. 125-140.

2）Bibliothèque nationale de France, N.a.fr. 23671, f° 175, f° 175 v°, f° 176. 最初の頁に «Astarté. – Oannès. – Adonis. Cybèle – Agdistis – Attis – Anaïtis» という表題がつけられている。

3）Frédéric Creuzer, *Religions de l'antiquité, considérées principalement dans leurs formes symboliques et mythologiques*, ouvrage traduit de l'allemand par Joseph-Daniel Guigniaut, Paris, Treuttel et Würtz, tome II, 1ère partie, 1829.

4）«297 ans avant la prise de Troie sous le roi Erichthonius, apparut sur le mont Cybelus l'image de la mère des Dieux»（N.a.fr. 23671, f° 175 v°）. 出典は Creuzer, *op. cit.*, p. 57.

5）«Cybèle est la g[ran]de Mère ayant son trône sur le sommet des montagnes et de là abaissant ses bienfaisans regards sur les plaines et les vallées qui s'étendent à ses pieds»（N.a.fr. 23671, f° 175 v°）. 読書ノートには語を略して書いている箇所があり、その場合は [　] で補っている。出典は Creuzer, *op. cit.*, p. 68.

レーの像が天より落ちてローマに運ばれ、神殿が大母神のために建てられた」と記される[6]。このように、キュベレーはもともとプリュギアの山の神なのだが、各地域の地母神と混淆して、ギリシアやローマなど地中海世界で大母神として崇められるようになったのである。

ノートには、アティスにまつわる神話が二つ書き留められている。一つは、元はディオドロスの『歴史叢書』第3巻58-59節で語られているもので、そこではキュベレーはプリュギアの王メオンの娘になっている。彼女はキュベロス山に捨てられるが、動物たちに育てられて成長し、人々や家畜の病気の治癒能力をそなえたキュベレーは山の母と呼ばれるようになる。ある日彼女は青年アティスを見て激しい恋心を抱く。キュベレーは父の宮廷に戻されるが、王は娘が処女ではなくなったことを知ってアティスを殺してしまう。キュベレーは従者のマルティアスとともにニュサへ逃げる。「一方、女神に見捨てられたプリュギアは飢餓に見舞われるが、やがてある神託に従って、ペシヌスでアティスのための礼拝を定めるようになった」という文で[7]、この神話のノートは閉じられる。ここでは、キュベレーもアティスも人間なのだが、ともに神格化されたようになっている。もう一つの神話はパウサニアスの『ギリシア案内記』第7巻17章からとられたもので、主人公はアグディスティスという名になっている。アグディスティスはゼウスの精液が地面に流れて生まれた男女両性の神霊（ダイモン）で、神々は恐れてその男根を切り取る。男根からアーモンドの樹が生え、その実をサンガリオス河神の娘が胎内に納めるとたちまち身ごもる。そうして生れたアティスはやがて美しい若者となり、その姿を見たアグディスティスは恋のとりこになる。アティスとプリュギア王の娘と婚姻が執り行われているところに、「突然アグディスティスがあらわれ、アティスを狂乱状態に陥れると、彼も王も自らの手で去勢するが、後悔の念にかられたアグディスティスの願いに応えて、ゼウスはアティスの体のどの部分も永遠に腐敗しないようにする」とノートに記されている[8]。この神話ではアグディスティスという名前になっているが、キュベレーと同一の存在であることは言うまでもない。ゼウスの精液から生まれたアグディスティスは両性具有の神であり、その切り取られた男性から生まれたアティスに女神が恋をし、最後には自らの男根を切り取ったアティスが永遠性を与えられるという結末を迎える。

また、「アティスはキュベレーと結びついている－アティスは失われ、再び見いだされる」と書かれ[9]、両者のための祭の様子が記述される。春におこなわれる祭

6）«207 av[ant] JC. la statue de Cybèle tombée du ciel à Pessinunte transportée à Rome un temple fut bâti à la g[ran]de Mère»（N.a.fr. 23671, f° 175 v°）. 出典は Creuzer, *op. cit.*, p. 74.

7）«Cependant la Phrygie abandonn[ée] par la déesse resta en proie à la famine jusqu'à ce que sur la répons[e] d'un oracle ils instituèr[ent] à Pessinunte un culte en l'honneur d'Attis»（N.a.fr. 23671, f° 175 v°）. 出典は Creuzer, *op. cit.*, p. 64.

8）«tout à coup Agdistis se présente et jette Attis dans un transport furieux. lui & le roi se mutilent de leurs propres mains, mais à la prière d'Agdistis repentant Jupiter accorde à chaque partie du corps d'Attis une éternel[le] incorruptibilité»（N.a.fr. 23671, f° 175 v°）. 出典は Creuzer, *op. cit.*, p. 66.

9）«Attis associé à Cybèle – Attis perdu & retrouvé»（N.a.fr. 23671, f° 175 v°）. 出典は Creuzer, *op. cit.*, p. 58.

の一日目は喪の日であり、祭司たちは「アティスの像がつるされた松の木を取り、女神の神殿に移し替え」、二日目は角笛を吹き鳴らし、三日目には踊り狂い、「ファロスの像ではなく、性器を行列の中で持ち歩く」と記される[10]。キュベレーの祭司の詳細についてはアプレイウスやルクレティウス参照という指示が、f° 175 v° および f° 176 の末尾に付け加えられている[11]。

f° 174 の上半分にはアドニスの場面のプランが書かれているが、その下方にルキアノスの『シリアの女神について』から取られたノートがある。これはギリシア語・ラテン語対訳版のルキアノス作品集から抜き出して[12]、フローベールがフランス語でメモをとったものである。ルキアノスはシリアの聖都ヒエロポリスにある神殿について述べているが、その中にある「像は汗をかき、動く」、「神殿の扉が閉じているときに女神はひとりごとを言う」という[13]。そして神殿の入り口には「120 クデのファロス像」があり、「高さはヤシの木ほど」であるとメモに記される[14]。この神殿に祀られた「シリアの女神」は名を秘されているが、祭司が «Gallus» と呼ばれていることから見て[15]、キュベレーであると考えて間違いない。

キュベレーに関するノートは、『聖アントワーヌの誘惑』の草稿群だけでなく、フローベール自身によって「神話」（Mythologie）と表題をつけられた 36 枚の草稿の中にもある[16]。f° 15 には、アプレイウスの『変身物語』第 9 巻のラテン語版からの引用が記されている[17]。草稿には、まず「アプレイウスにおけるキュベレーの祭司の肖像」という小見出しがあり、「街道や町々をシンバルやクロタルを鳴らしながら、シリアの女神をあちこちに運んでは、物乞いを強いている下衆な屑の民の一人である」老人が描かれる[18]。次いで「キュベレーの祭司たちの活動」という

10）«on enlevait le pin où était suspendue l'image d'Attis et on le transplantait dans le temple de la déesse. [...] l'organe, et non le phallus, porté en procession»（N.a.fr. 23671, f° 175 v°）. 出典は Creuzer, *op. cit.*, p. 58-59.

11）«p[ou]r les prêtres de Cybèle Apulée»（f° 175 v°）; «voy. Lucrèce. II. 618»（f° 176）.

12）Lucianus, *De Syria Dea*, in *Luciani Samosatensis Opera*, Paris, Firmin Didot, 1840, p. 733-747. この対訳版は、フローベールが作成した参照文献のリストに記載されている : «Luciani, *Opera, graece et latine*, Paris, F. Didot, 1840»（Flaubert, *Œuvres complètes*（以下 *OC*）, tome V, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 2021, p. 203）.

13）«Simulacre qui sue & se remue – la déesse parle toute seule quand le temple est fermé»（N.a.fr. 23671, f° 174）. 出典は Lucianus, *op. cit.*, p. 734.

14）«Phallus de cent vingt coudées, h[auteur] qui y monte com[me] à un palmier»（N.a.fr. 23671, f° 174）. この箇所の原典であるギリシア語では像の高さが «τριήκοντα ὀργυιέων»（30 オルギュイア = 53m）であるのに対し、ラテン語訳は «centum et viginti cubitorum» となっている（Lucianus, *op. cit.*, p. 741）。フローベールはギリシア語原文ではなく、ラテン語訳の方を読みながらノートをとっているようである。

15）«le Galle mort»（N.a.fr. 23671, f° 174）. ラテン語訳では «ubi mortuus est Gallus»（*op. cit.*, p. 746）.

16）Bibliothèque nationale de France, N.a.fr. 14278.

17）Apuleius, *Metamorphoses*, in *Apuleii Opera omnia*, volumen prinum, Londinium, Valpy, 1825. アプレイウスのラテン語テクストは数多く出版されているが、フローベールのノートと合致するのは、ロンドンで刊行されたこの校訂版だけである。

18）«portrait d'un prêtre de Cybèle dans Apulée. [...] unum de triviali popularium fece, qui per plateas et oppida cymbalis et crotalis personantes, deamque syriam circumferentes, mendicare compellunt»（N.a.fr. 14278, f° 15）. ラテン語の文の出典は Apuleius, *op. cit.*, p. 539-540. 原文では «fæce» という語がノートでは «fece» となっているが、それ以外は忠実に写し取られている。

小見出しがあって、祭司たちが「雑多な色に身を包み、各々ぞっとするような姿で」出発し、「絹のマントに覆われた女神を私が運ぶように命じる」と記される[19]。「私」とは魔法によってロバに変えられた青年ルキウスである。つまり語り手であるロバの背中の上にシリアの女神の像をのせて、祭司たちの一行が町を練り歩くわけである。楽器が打ち鳴らされる中、祭司たちは「狂ったように飛び跳ね」、「ときには自分の肉を噛み、最後には、もっていた諸刃の剣で各々自分の腕を切りつける[20]」。ルキアノスと同様、祭司たちが崇める神は「シリアの女神」となっているが、小見出しにあるように、フローベール自身がそれをキュベレーと同定している。「神話」の草稿の別の頁では「アテス」という表題があり[21]、パウサニアス『ギリシア案内記』のフランス語訳からの引用がある[22]。内容的にはアグディスティスがアティスを狂乱状態に陥れる話で、N.a.fr. 23671, f° 175 v° に書かれていた神話と同じなのだが、N.a.fr. 23671 が『古代の宗教』からの要約だったのに対し、こちらは元のパウサニアスからの直接の引用となっている。

以上、キュベレーにかかわる読書ノートを見てきたが、元の資料によって女神の呼称も違えば、取り上げ方も異なっている。アプレイウスでは「シリアの女神」の像を運びながら踊り狂う祭司たちが描かれ、ルキアノスは同じく「シリアの女神」の神殿や像に焦点をあてる。ルクレティウスについては、ノートには参照箇所しか示されないが、『物の本性について』第 2 巻では「イダ山の母」である女神の像が戦車に乗って町々を行進する[23]。一方、パウサニアスでは「アグディスティス」がゼウスの精液から生まれ、最後にはアティスを去勢にまで至らしめる。クロイツェルの著作は総合的であり、キュベレーが各地域各時代に共通して大母神であること、ディオドロスやパウサニアスにアティスにまつわる神話があること、春におこなわれる祭でアティスの喪失を嘆き復活を祝う様子などを記述している。

1848 年 5 月の執筆開始以前に作成された神々に関するセナリオでは、キュベレーはアドニスの後、エフェソスのディアナの前に登場することになっている[24]。個々の場面のプランでは、キュベレーは次のように書かれる。

---

19）«les Prêtres de Cybèle en campagne. [...] variis coloribus indusiati, et deformiter quisque formati [...]. [...] deamque serico contectam amiculo, mihi gerendam imponunt»（N.a.fr. 14278, f° 15）. ラテン語の文の出典は Apuleius, *op. cit.*, p. 547-548.

20）«fanatice pervolant [...], et nonnunquam morsibus suos incursantes musculos, ad postremum ancipiti ferro quod gerebant sua quisque bracchia dissecant»（N.a.fr. 14278, f° 15）. 出典は Apuleius, *op. cit.*, p. 549-550.

21）«Attès.（ἄττης»（N.a.fr. 14278, f° 34）. アティスは Attis, Attès, Atys など、さまざまに綴られる。

22）Pausanias, *Description de la Grèce*, tome IV, traduction nouvelle par Étienne Clavier, Paris, J.-M. Éberhart, 1820, p. 139.

23）«*Idœam* vocitant matrem»（Lucrèce, *De la nature des choses*, traduit par La Grange, tome I, Paris, Didot, 1794, p. 180. このラテン語・フランス語対訳版はフローベールの蔵書目録にある（*La bibliothèque de Flaubert*, sous la direction de Yvan Leclerc, Publications de l'Université de Rouen, 2001, p. 73）.

24）N.a.fr. 23671, f° 171 ; Flaubert, *Scénarios de* La Tentation de saint Antoine : *Le Temps de l'œuvre*, présentation, transcription et notes par Gisèle Séginger, Presses Universitaires de Rouen et du Havre, 2014, p. 156.

act. des Galles [...]
Attis superl des Gall.
le Diabl & Antoine Cybèle – ~~prêtres de Cybèle — Contrair d'Adonis — gaieté~~ [...][25]
le Diable fais la descrip

まず「キュベレー」と書かれ、その右の「キュベレーの祭司たち－アドニスの逆－陽気さ」に抹消線が引かれる。そして左余白に「祭司たちの行動／アティス、祭司たちの頂点／悪魔とアントワーヌ／悪魔が描写する」が挿入される。ほとんど走り書きのメモなので意味をとりづらいが、実際に執筆された場面から類推すると、キュベレーの祭司たちが踊り狂う情景があり、その後に祭司たちの頂点にたつアティスがあらわれ、悪魔がアントワーヌに説明するというプランを考えていたようである。「アドニスの逆」というのはアドニスの葬礼のように沈んだものではなく、陽気な祭という意味だと思われるが、なぜ抹消線が引かれているのか、よく分からない。とにかく、事前のプランらしきものはこれだけであり、フローベールは清書原稿の 486 頁で、アドニスの棺台が消える場面の後に、下書きなしでキュベレーの祭を書きはじめる。

最初の頁では、カスタネットやシンバルの音が響く中、祭司たちがロバを連れ、「ひも付きの覆いのかかった四角い大きな箱がロバの背で揺れている」情景が描かれる[26]。2 頁目で、「箱の緑色の覆いが取り去られ、箱を包む羊毛のカバーがあらわになると」、「人々は遠ざかり、ロバは立ち止まる[27]」。やがてカバーも取りはずされ、「箱が開くと、バラ色の絹の天蓋の下にキュベレーの小さな像が見える[28]」。アプレイウス『変身物語』では絹のマントに覆われた女神の像がロバの背中の上にじかに載せてあったが、ここでは四角い大きな箱に入っている。ちょうど、アプレイウスで描かれた祭司たちの運ぶロバの上に、ルキアノスが語るヒエロポリスの神殿とその中の像を小さくして載せたようなかたちになっているのである。箱が開く前に、祭司たちの長（archi-galle）が「これなるは恵み多き女神、イダの山の女神、シリアの大いなる母」と呼びかける[29]。ルクレティウスの「イダ山の母」、アプレイウスやルキアノスの「シリアの女神」という呼称がここで混ざりあっている。呼びかけに続く祭司長の女神への賛美の言葉はアプレイウスからとられ、箱が開けられてからの神殿の描写は主にルキアノスから取られている。

やがて祭司長が、女神の好むのは「血だ！あなたに捧げる！山の母神よ」と叫ぶと、祭司たちは「剣で自分たちの腕を傷つける[30]」。このあたりから、祭の様相

25）N.a.fr. 23671, f° 173 v°. 省略が多く、分かりづらいが、左余白の 1 行目は « act[ions] »、2 行目は « superl[atif] »、4 行目は « fais[ant] la decrip[tion] » と解釈している。

26）« une gde boîte carrée recouverte d'une housse ~~verte~~ à cordons <lui> ballotte sur ~~son~~ <le> dos »（N.a.fr. 23664, f° 486）. < > は行間の挿入である。

27）« Quand on a retiré la housse <verte> de la boîte & mis à nu <~~découvert~~> la couverture de laine qui ~~le protège,~~ l'enveloppe [...], la foule s'écarte, l'âne s'arrête »（N.a.fr. 23669, f° 314）.

28）« la boîte s'ouvre ~~à deux battans~~ et l'on <y> aperçoit ~~dans l'intérieur~~ sous un pavillon de soie rose, une petite image de Cybèle »（N.a.fr. 23664, f° 490）.

29）« Voilà la bonne déesse, ~~la mère~~ <l'idéenne> des montagnes, la gde Mère de Syrie »（N.a.fr. 23664, f° 488）.

30）« « [...] du sang ! à toi ! à toi, Mère des montagnes !»（ils se tailladent les bras avec leurs

は変化を見せる。フローベールはこの祭が最高潮に達する場面のエスキスをあらかじめ書いていて、そこには「蒼白の女たちが歯をガタガタ鳴らして、血まみれの男たちに襲いかかる」、「愛の叫び」の後、「絶望－ひとり－アティス」と記される[31]。祭司たちはみな男性なのに、ここで突然女性たちが闖入して交わった後、絶望の中でアティスだけが残るという状況をフローベールは考えていたらしい。下書きの段階になると、まず「女の服をまとった男たちと男の服を着た女たちが大声をあげながら互いに追いかけ合い[32]」、やがて「緑の木陰で神秘的な売春をしているのが見える[33]」。最後に「去勢した祭司たちは猛り狂った恋する女たちをけばけばしい祭服で包む[34]」。この「神秘的な売春」は『古代の宗教』第2巻の記述から来ていて、プリュギアでもヒエロポリスでも「狂信的な女たちは、自分たちに熱い恋情を示すこの自ら去勢した祭司たちに夢中になり、彼らと獣のような交わりをしていた」という[35]。淫乱な場面に見えるが、これも女神に捧げる宗教行為なのであろう。一方、アティスは、エスキスとは異なって清書では、祭司や女たちが遠くの彼方へ消え去った後に、押し寄せる神々の群れの中に姿をあらわす。悪魔は、「あれがプリュギアのアティスだ」、「石の斧を投げ捨てて、森の中に行き、自らの失われた男性を嘆くのだ」とアントワーヌに説明する[36]。このように、アティスはキュベレーの祭とは切り離されて、パウサニアスの伝える神話にあった自ら去勢する行為だけが、悪魔の口から語られる。

アプレイウスやルキアノスにも、またルクレティウスにもアティスに関する言及はないので、それらの文献を基にしたキュベレーの祭にアティスがあらわれないのは自然なことである。読書ノートにはアティスの像を祀ってその死を嘆く祭も記されているのだが、そのような情景はキュベレーの祭からは完全に除外されている。それは、キュベレーの祭司たちがあらわれる前にアドニスの葬礼の場面があり、同じような情景が重なってしまうからであろう。その結果、アティスにまつわる神話のほとんどが表に出なくなり、最後に自ら去勢する行為のみがキュベレーとは独立して、悪魔の口から語られるだけになる。

1856年の第2稿は基本的に第1稿と変わりはない。キュベレーがアントワーヌの前にあらわれるのは1874年の第3稿である。

---

poignards»（N.a.fr. 23664, f° 491）.

31）«des femmes <pâles> claquant <qui claquent> des dents se ruent sur les hommes ensanglantés – [...] cris d'amours [...] – désespoir – un – Atys.»（N.a.fr. 23670, f° 42 v°）

32）«Des hommes vêtus en femmes & des femmes en habit d'hommes se poursuivent en poussant de gds éclats de voix»（N.a.fr. 23671, f° 41）.

33）«on voit sous des verdures des prostitutions mystiques»（N.a.fr. 23669, f° 310 v°）.

34）«des prêtres-eunuques enveloppant les <amoureuses> femmes <furieuses> dans leur dalmatique chamarrée.»（N.a.fr. 23669, f° 308 v°）

35）«Là aussi des femmes fanatiques, se passionnant pour ces eunuques volontaires qui leur rendaient un brûlant amour, avaient avec eux un monstrueux commerce»（Creuzer, *op. cit.*, p. 30）. フローベールはアスタルテに関するノートの余白に«fêtes – castrats / amour des fem[mes] p[ou]r les eunu[ques]»（N.a.fr. 23671, f° 175）とメモしている。

36）«c'est Attis de Phrygie [...] il jette ~~derrière lui~~ sa hache de pierre, et <qui s'en> va pleurer dans les bois sa virilité perdue»（N.a.fr. 23664, f° 494）.

## 『聖アントワーヌの誘惑』（1874）におけるキュベレーとアティス

1870 年の春に作成された作品全体のプラン（grand plan）の中で、第 5 部にあたる神々の列では、キュベレーはエフェソスのディアナとアピスの間に置かれる[37]。その後につくられたプランでは、キュベレーの後にはアピスではなく、アドニスが来るようになる。そして「キュベレー、最後にアティスの喪失を嘆く。－しかしどのようにそれと小さな箱を共存させるのか？」と書かれ、その下の行間に「キュベレーそのものが箱から出て、アティスの喪失を嘆く」と鉛筆で書き留められる[38]。フローベールはこの時点ですでにキュベレーとアティスを登場させることを決めていて、女神の像の入った箱といかにして両立させるか自問したのち、女神の本体が箱の中から浮かび出るという展開を思いつく。

このプランの後につくられたと思われる読書ノートが、N.a.fr. 23671, f° 42 の表裏にある。ノートは、ミショーの『世界人名事典』第 53 巻および 54 巻[39]、モーリーの『古代ギリシア宗教史』第 3 巻[40]、クロイツェルの『古代の宗教』第 2 巻から引かれている。その中から、キュベレーとアティスに関するノートを 4 箇所取り上げてみよう。

> Phrygienne – La place d'honneur est à la matière à la terre [...][41].

> ils mendiaient, en promettant de remettre les péchés, vendaient des philtres amoureux. – Les cérémonies auxquelles ils se livraient étaient selon eux des purifications[42].

> On sacrifiait un bélier – ~~ott~~ un agneau – avec lequel on se purifiait ? (Creuts 75[43].

> Un pin, (idée de résurrection, de permanence, près d'Attys. Au pied du pin était couché un agneau, lequel rappelle le premier signe du zodiaque, celui qui ouvre l'année, celui dans ~~dtt~~ lequel se trouve le soleil lors du commencement du printemps, lors de l'équinoxe de mars[44].

最初の「プリュギアの女神」はもちろんキュベレーであり、「その栄誉の場は物質

37）N.a.fr. 23671, f° 95 ; *OC*, t. V, p. 169.
38）«Cybèle, à la fin pleure Attys. – mais comment coexister cela avec la petite boîte ? <Cybèle en sort en nature & pleure Atys>» (N.a.fr. 23670, f° 3).
39）Louis-Gabriel Michaud, *Biographie universelle, ancienne et moderne : partie mythologique*, tome 53 & 54, Paris, L.-G. Michaud, 1832. 以下、*Biographie* と略記する。『世界人名事典』の第 53 巻から第 55 巻までは神話の部なので、『世界神名事典』と訳すべきかもしれないが、通例の訳に従った。
40）Alfred Maury, *Histoire des religions de la Grèce antique*, tome 3, Paris, Ladrange, 1859.
41）N.a.fr. 23671, f° 42. 出典は *Biographie,* t. 54, p. 60.
42）N.a.fr. 23671, f° 42 v°. 出典は Maury, *op. cit.*, p. 88.
43）N.a.fr. 23671, f° 42 v°. 出典は Creuzer, *op. cit.*, p. 75.
44）N.a.fr. 23671, f° 42. 出典は *Biographie,* t. 53, p. 348-350.

に、大地にある」というのは、創造神ではなく、創造された物質や大地に宿る神だということである。次の「彼らは物乞いをしていた」で始まる箇所は、キュベレーの祭司たちは人々の罪を免じるためと称して清めの儀式をおこない、賽銭をもらったり、愛の媚薬なるものを売りつけたりしていたということである。3つ目の「雄羊を－子羊を－生贄として捧げていたが、それによって身を清めていたのか」は、『古代の宗教』から取られたことがフローベール自身が書いたレフェランスから分かるが、注意が必要であろう。確かにクロイツェルは祭司たちがアティスに供えるために雄羊を生贄にすることは述べているのだが、子羊を生贄にするとは書いていない。フローベールはあえて子羊を雄羊と同一のレベルに置こうとしているのである。子羊を強調しようとする傾向は4番目の引用にも見られる。1行目から2行目にかけて「松の根元に子羊が横たわっていたが、子羊は黄道帯の最初の宮を想起させる」と書かれているが、元の『世界人名事典』のアティスの項には「雄羊あるいは子羊が横たわっている…」とあるのを[45]、フローベールは「子羊」だけにしている。4番目の引用の最初の「松（再生や恒久性の観念、アティスの傍らにある」は、常緑樹である松が常に再生し、永続するという点でアティスと結びつくという意味である。また、その松に常に寄り添う雄羊（ノートでは子羊）が黄道十二帯の最初の宮となり、引用の最後にあるように、「太陽は春の初めに、三月の春分に白羊宮にある」ことから太陽と羊、さらには太陽とアティスとが結びつくのである。

ノートにはまた、オウィディウスの『祭暦』第4巻にある神話が取られている。

> – Cybèle aime Atys. Cybèle vieille reine de Phrygie – Atys lui fait des infidélités p$^{r}$ la fille du fleuve Sangare. Elle fait périr la nymphe en pratiquant des incisions mortelles sur un arbre auquel la vie de celle-ci est attachée. Atys furieux s'empare d'un caillou & se mutile[46].

オウィディウスの原文ではキュベレーは女神なのだが[47]、このノートは『世界人名事典』に基づいているので、「プリュギアの年老いた女王」となっている。キュベレーはアティスと恋仲になり、アティスは決して裏切らないと誓約したにもかかわらず、「サンガリオス河神の娘」と情を交わしてしまう。キュベレーは「娘の命が籠った木に致命的な切込みを入れてそのニンフを殺す。アティスは狂乱して、小石を取って自らを去勢する」。なぜアティスが去勢するのか、ノートでは明確ではないが、キュベレーが嫉妬のあまり、アティスを狂乱状態に陥れ、裏切りの原因となった男根を切り取るように仕向けたのであろう。

これらの読書ノートを踏まえて、フローベールは詳細なプランを作成する。祭

45）«Le bélier ou l'agneau que l'on voit couché au pied du pin auquel est lié Atys, rappelle invinciblement le premier signe du zodiaque»（*Biographie,* t. 53, p. 350）.
46）N.a.fr. 23671, f$^{o}$ 42. 2行目の «p$^{r}$» は pour の略記である。出典は *Biographie,* t. 53, p. 347.
47）«Dea Magna»（Ovidius, *Fasti*, in *Ovidii Nasonis Opera quæ supersunt*, tomus tertius, Parisii, J. Barbou, 1762, p. 91）.

の前半部は第１稿と基本的に同じなので、箱が開いてからの場面を引用する。

2e couplet. mieux préciser la Nature de Cybèle.
Cybèle est la matière, la terre
Voulez-vous des philtres — Les galles promettent de remettre les péchés, de purifier [...]
elle aime le sang contre
On égorge l'agneau au pied du pin X（l'agneau est le signe
X et on asperge avec
son sang l'assistance. dans lequel le soleil entre au commencemt du printemps.）
alors
Cybèle, sort de la boîte.
Elle cherche Atys. .（qui paraît de derrière l'arbre.
[...] Tu m'as fait des
Ah ! enfin te voilà. déclaration d'amour furieuse infidélités, n'importe
Ψ. Les hommes se
châtient pr ~~Qu'est-ce que tu veux que je fasse de toi ? tu es vieille~~
ressembler au Dieu. Atys Pr lui ressembler ~~Et il~~ se châtie Ψ.
pr être faible com elle[48].

最初の「二番目の歌」は、祭司長が女神に呼びかけて讃歌を吟じるのが最初の歌で、それに続く朗誦ということである。「キュベレーは物質であり、大地である」、「祭司たちは罪を免じて、清めをすると約束する」とあり、左の余白には「愛の媚薬」を売るときの文句が書かれている。その下の行間に「女神は血を愛する」、さらに「松の根元にいる子羊の喉を裂く」とあって、フローベールが子羊を生贄として女神に捧げる場面を考えていたことが分かる。この子羊は「神の子羊」つまりイエス・キリストに通じるものであって、フローベールが読書ノートで子羊にこだわっていた理由が理解できる。そして、「キュベレー、箱から出る」、「アティスを捜す」、「ああ、ようやく会えた。狂おしい愛の告白」と続く。このあたりまではおおよそ読書ノートに沿って進行するのだが、余白の書き込みはノートから少々外れたかたちとなる。右の余白には「あなたは私を裏切ったが、もうかまわない」というキュベレーの言葉、下の余白には「アティス　女神に似るために自らを去勢する」、その下に「女神のように弱くなるために」と書かれる。パウサニアスやオウィディウスの伝える神話では、キュベレーの激しい嫉妬心がアティスの去勢の引き金となるのだが、ここでは嫉妬の炎は和らいでアティスを許し、アティスも「弱い」女神と同じようになるために男性性を失う。さらに、左余白には「男たちは神と似るために自らを去勢する」と付け加えられる。祭司たちもアティスを「神」と見做して、アティスと同じ行為をするのである。とにかく、この不思議な結末をもったプランを基に、フローベールはキュベレーの場面をつくり上げていく。

この場面の執筆の開始は 1871 年 8 月。下書きは 9 頁あり、4 つの段階に分かれ

48）N.a.fr. 23668, fo 207 vo.

る。本稿では下書きを順にたどっていくことはせず、第２段階で書かれたアントワーヌとイラリオンとの会話についてのみ言及する。アティスやその他の男たちが血まみれになっている様を前にして、アントワーヌは「うんざりして吐き気がする！これは罪と狂気の極みだ」と言い、「どんな忌まわしい本能にこの神々は呼応しているのか？」と問いかける[49]。イラリオンは「彼らは魂の中にあるもっとも深いあらゆるものを満たしている－淫乱な欲望」と答え、「あなたは深く考えることを望んで自然を超える愛欲がどんな味わいをもっているのか知らないのだ」と相手の無知を責める[50]。さらにアントワーヌが「この祭礼は魂のもっとも穢れた面を称揚するための悪魔の罠だ」と言うと、イラリオンは「淫欲はもっとも厳格な苦行の効果に達する」と応える[51]。アントワーヌにとって、目の前で起こっている惨劇は狂気の沙汰であり、悪魔の仕業に他ならない。一方、イラリオンは神々や祭司たちの行為の中に、心の深奥に内在するみだらな欲望と快楽を読み取り、それがもっとも厳しい苦行に通じるものであることを喝破する。この興味深いやりとりも第３段階以降、跡形もなく消えてしまう。おそらくフローベールは自らを去勢したアティスの場面の後に、棺台に横たわるアドニスの場面が自然につながるように、アントワーヌの反応やイラリオンによる解説を削除したのであろう。

キュベレーとアティスの場面は決定稿ではどうなるのか、プレイアード版で確認していこう。カスタネットやシンバルの音が響き渡る中、祭司たちが箱を背負ったロバを連れてやってくるのは第１稿と同じである。ただし、「行列の最後の者たちが、てっぺんの燃えている大きな松を枝付き燭台のように地面にまっすぐ立てると、その木の一番下の枝が小さな羊に影を投げかける」といったように[52]、アティスと結びついた「松」と「羊」がすでに顔を覗かせている。やがてロバは立ち止まり、箱の上の覆いが取られると、「その下に、黒いフェルトの二番目の包みがある[53]」。祭司長がキュベレーへの賛美の言葉を唱える間に、フェルトの包みが取りはずされ、箱が開けられる。そして、祭司長が女神は血を愛するのだと言うと、祭司たちは短刀で腕を傷つける。このあたりから、第１稿とは異なる展開になる。祭司長は「女神の気に入るためには苦しまねばならぬ！苦しめば、あなたたちの罪も赦される。血がすべてを洗い流す」、「女神は別のもの、穢れなきものの血を求めておられる」と叫ぶ[54]。そして「祭司長が羊の上に短刀を振りかざす」

49）«Mon cœur se lève de dégoût ! c'est le comble du crime et de folie. [...] à quels instincts abominables ces dieux répondent-ils ?» (N.a.fr. 23668, f° 202)

50）«Ils ~~répondent à~~ <~~satisfont~~> <assouvissent> tout ce qu'il y a <réside> de plus profond <dans l'âme – le désir lubrique> [...] Tu ne sais pas quel goût ont des amours <voluptés> qui dépassent la nature en voulant la réflexion» (id.).

51）«ces cultes sont des ruses du Démon p^r^ glorifier les côtés immondes de l'âme» ; «La luxure atteint aux effets de la Pénitence la plus austère» (id.). この二つの文は左余白に書かれている。

52）«Les derniers du cortège posent sur le sol, droit comme un candélabre, un grand pin qui brûle par le sommet, et dont les rameaux les plus bas ombragent un petit mouton.» (*OC*, t. V, p. 106)

53）«Il y a, en dessous, une seconde enveloppe de feutre noir» (*id.*). 第１稿では箱の覆いが緑色で、その下のカバーには色の記載がなかったが（注 27 参照）、ここでは逆に、覆いには色の言及がなく、カバーが「黒いフェルト」となっている。

54）«C'est pour lui plaire qu'il faut souffrir ! Par là, vos péchés vous seront remis. Le sang lave

と、「アントワーヌは恐怖にとらわれ、『子羊の喉を裂いてはならぬ！』」と止めようとする[55]。祭司長の言葉には、自分の体を傷つけるだけではなく、穢れのない生き物を生贄として女神に捧げることによって、人々の罪を贖うという考えが明確に示されている。一方、アントワーヌにとって、「子羊」はイエス・キリストの象徴だから、子羊を殺してはならないという言葉が口をついて出てきたのである。祭司長が子羊の血を人々に振りかけていると、「祭司たちの間から、ひとりの女性が出てくる ― 小さな箱に閉じ込められた像と瓜二つである[56]」。プランでキュベレーが「箱から出る」とあったように、女神が祭の中に姿をあらわす。キュベレーは青年アティスを見つけ、近づいて抱き締める。そして、相手の不貞を赦し、「あなたが好き！私の体を温めて！一体になりましょう！」と懇願する[57]。キュベレーが求めるのはアティスの愛であり、彼の肉体との結合である。それに対して、アティスは「私に愛があっても、あなたの本質に入り込むことはできません」、「乳で膨れたあなたの胸、長い髪、生けるものが産まれる巨大な脇腹が羨ましい。どうして私はあなたではないのでしょう！どうして私は女ではないのでしょう！―いや、だめです！行ってください！男であることがおぞましい！」と言って[58]、尖った石で自分の男根を切り取る。アティスが言う「あなたの本質」つまりキュベレーの本質とは母なる神であること、豊穣の女神であることだろう。愛あるいは肉体の結合によっては女神の本質に入り込むことができないので、アティスは逆に自分の男性を奪い去ることによって女神と同一の存在になろうとする。アティスは女神に近づくために、あるいは女神と同じになるために、女神を遠ざけるという逆説的な道を選ぶ。「祭司たちはこの神に倣い、信者たちも祭司に倣う」、「男たちは女たちと服を交換して抱き合う[59]」。この最後の場面は、第１稿で「女の服をまとった男たちと男の服を着た女たち」が交わる「神秘的な売春」と同じである。

この奇妙な祭の場面で何が問われているのかという問いにたいしては、魂の深奥にある「淫乱な欲望」を満たすものであり、「淫欲はもっとも厳格な苦行の効果に達する」という、下書きに記されたイラリオンの言葉が答えとなるように思われる。この淫欲と苦行の結びつきというテーマは、第１稿で祭が最高潮になる箇所でもあらわれていた。祭司たちが自分の腕を傷つけるのは苦行に他ならないし、狂信的な女たちと性交渉するのは祭司たちが去勢しているだけに一層みだらな行為となる。しかし第１稿においては、腕を傷つけるよりも大きな痛みを伴う去勢

---

tout ; [...]. Elle demande celui d'un autre — d'un pur !» (*OC*, t. V, p. 108)

55) «L'archi-galle lève son couteau sur le mouton. ANTOINE pris d'horreur : «N'égorgez pas l'agneau !»» (*id.*)

56) «Du milieu des prêtres sort une Femme, — exactement pareille à l'image enfermée dans la petite boîte.» (*id.*)

57) «je t'aime ! Réchauffe mon corps ! unissons-nous !» (*id.*)

58) «Malgré mon amour, il ne m'est pas possible de pénétrer ton essence. [...] J'envie tes seins gonflés de lait, la longueur de tes cheveux, tes vastes flancs d'où sortent les êtres. Que ne suis-je toi ! que ne suis-je femme ! — Non, jamais ! va-t'en ! Ma virilité me fait horreur !» (*id.*)

59) «Les prêtres font comme le dieu, les fidèles comme les prêtres. Hommes et femmes échangent leurs vêtements, s'embrassent» (*id.*).

を祭司たちは済ませた状態にあるし、自ら去勢するアティスも祭の外にあって、悪魔の口から説明されるだけである。祭の中にキュベレーの淫欲とアティスの自己去勢とを取り込もうとしたのが、第３稿である。「私の体を温めて！一体になりましょう！」と誘うキュベレーの言葉は愛の告白というよりも、淫欲の吐露である。アティスもキュベレーの誘いに応えることはしないものの、女神の豊かな乳房や母胎をもちたいという願望は、ある意味不遜でみだらな欲望である。自分の男根を切り取る行為は、厳しい苦行であると同時に底知れない欲望の発露でもある。苦行と淫欲の合わさったアティスの行為は祭司や信者たちに伝染する。

第３稿では贖罪というテーマも導入されている。祭司長の言葉には、人々の罪を償うためには苦行をおこなうだけでなく、生贄の血を女神に捧げることが必要だという考えが示されている。そして、生贄としてアティスには雄羊を、キュベレーには雄牛を捧げていたというクロイツェルの記述を[60]、フローベールは子羊に代えて、アントワーヌにイエスの磔刑を想起させるようにする。「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました」とパウロが言うように[61]、まさにイエスは人々の罪を贖うための生贄であった。では、アティスの行為には贖罪という要素があるのだろうか。キュベレーに対する答えを見る限り、そこに贖罪の意識があるとは思われない。しかし、喉を裂かれる子羊に倣って、アティスが自ら去勢し、さらにそれに倣って祭司や信者たちが去勢する一連の行動を見ると、アティスたちの男根は神への供え物としてあらわれ、その血は贖罪のために流された血のように見えてくる。ただし、アティスたちの行為を突き動かすのは、淫欲である。フローベールは、淫欲とは縁のないイエスを対蹠点に置くことによって、心の奥底にある淫乱な欲望が引き起こす宗教的な苦行や贖罪を浮かび上がらせようとしたのであろう。

（大阪大学名誉教授）

60）«Souvent aussi il est question des *Criobolies*, ou des sacrifices d'un bélier, en l'honneur d'Attis, analogues aux *Taurobolies* ou sacrifices du taureau, célébrés en l'honneur de Cybèle»（Creuzer, *op. cit.*, p. 75）.

61）『ローマの信徒への手紙』3 : 25.（新共同訳）